

---

# 悪夢

みかど

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪夢

### 【Nコード】

N4171W

### 【作者名】

みかど

### 【あらすじ】

それはひとつの夢から始まった・・・今までにない悪夢の始まり。主人公、加賀悠介<sup>かがゆうすけ</sup>は普通の高校生活を送っていた。ある悪夢の始まりにより悠介の生活が崩れていく。夢と現実。悠介は元の高校生活を取り戻せるのだろうか。

## プロローグ

夢。それは良い夢と悪い夢がある。

俺はさっき寝た。そしてたぶん今は夢の中だろう。ここは・・・

### 【私立彩夢高等学校】

俺の通っている高校の校門の前だ。

「やけにリアルな夢だな・・・」

辺りは明るいが、人影がまったくない。不気味な静けさな中、俺は校内に入ろうとした。

バンッ

どこからか銃声が聞こえた。

「なんだ今の。人いるのかな」

再び歩きだそうとしたとき、目の前に地面が広がった。じわじわと湧き上がる痛み。

「俺・・・撃たれた・・・？」

視界が狭くなる中、首を動かし銃声が聞こえた方向を見た。誰かいる。

「だれ・・・だ」

意識が薄れ始めてきた。誰かわからないが近づいてくる。

『じゃあな。また会おう。悠介』

その言葉と共に、完全に意識が無くなった。

## 1 夢 悪夢への入り口

目が覚めた。 AM 6 : 59

いつもより起きるのが早かった。

「あれは・・・悪夢だったのか？」

夢で起きた出来事。それは自分が殺されてしまう夢。

似た内容の夢は今までに何度も見たことはあるが、今回は違う。

「この胸の違和感・・・なんなんだ」

夢の中で撃たれた胸。変な違和感がある。急速に治った傷・・・

いや何か違う。元から傷の痕はついてないし、今もない。

「なんか怖いな・・・」

夢のことが気になるが、今は学校に行く準備をしよう。

俺、加賀悠介は私立彩夢高等学校の2年生だ。

成績はいたって普通、容姿も割と満足している。友達も少なくない程度にいる。

親友もいるし、彼女だっていたこともあった。

そんな生活に慣れてきた今、ずっとこんな感じで生きていきたいと思う。

準備ができた俺は家をでて、学校に向かう。

「さすがに今日は早かったな。まだ彩夢の生徒を見かけない」

時間もまだまだある。今日はのんびりして行こう。

まだ胸の違和感が消えない。1日たったら治るだろう。

家から学校までは、歩いてほしい20分ほどかかる。

今日はのんびりしてたせいか、35分もかかってしまった。

教室に着くと、誰かいた。

「おう、おはよう」

声をかけてきたのは、親友の上野和希だ。

「和希か、早いな。まだ8時だぞ」

「いつもはもつと遅いんだけど、今日は起きるのが早かったから」

「和希もか。俺も早く起きたんだ」

「ははっ奇遇だな」

それから俺達はいつものように世間話をして時間をつぶした。

授業もいつもと変わらず、放課後を迎えた。

「なあ悠介」

突然和希が話かけてきた。

「なんだ？」

「昨日変な夢を見たんだ」

「どんな夢だ？」

「悠介を殺す夢」

まさかとは思ったが、やっぱりそうだった。

「よくわかんないんだけど、気付いたら銃で悠介を撃ってた」

「やな夢だな」

「ほんとやな夢だったよ。俺が悠介を殺すなんて」

俺は昨日見た夢のことを和希には話さなかった。

正しく言えば、話せなかった。

なぜか話すなと頭の中で聞こえた気がしたからだ。

共通の夢を見るなんて不思議だ。

これが良い夢だったならよかったのに、悪い夢だからな。

「たかが夢だ。あんまり気にすんな」

「そうだな。そうするよ」

そうして俺達は帰宅した。

部屋に入って着替えた俺はベッドに寝転がった。

「和希も同じ夢か・・・しかも殺す側と殺される側・・・」

不気味に思い、俺は少し寝ることにした。

ひと眠りした俺は飯を食って、シャワーを浴びた。  
夢は見なかった。

「今日は大丈夫だろ」

俺は布団に入り目をつむった。

### 【私立彩夢高等学校】

まただ。

昨日と同じ夢。そして昨日と同じ場所。

昨日と同じ夢なら和希に撃たれるはず。

そんな気がしたから、俺は校内には向かわず学校の周りを歩くことにした。

「和希・・・？」

ちょうど学校の裏側まで来たところに和希がいた。

「悠介か？・・・ここ夢だよな？」

「みたいだな」

「昨日と同じ夢なんて信じられないよ」

「ああ。俺もだ」

「俺もつてことは・・・悠介も昨日見たのか？」

「まあな。昨日・・・和希かはわからないが、撃たれて死ぬ夢を見た」

「そうだったのか・・・」

「おい・・・和希、それ・・・」

和希の手には拳銃が握られていた。

「うん。昨日も今も、夢の中に来たらなぜか持ってるんだ」

「危ないからそれしまえよ」

「ああ、ごめん。」

和希は拳銃をズボンとベルトの間に挟んだ。

「悠介も危ないよ。それ」

「え？」

和希が指さしたそこには、日本刀が腰にぶら下がっていた。

さつきまでこんなもの無かったはずなのに。おかしい。

「なんで銃やら刀があるんだ」

「悠介は確か、昨日は刀なかったよね？」

「ああ」

和希もそこには気づいていたらしい。

「とりあえずここにも何も無いから、校舎に入ってみるか？」

「そうだな」

和希の提案に俺は賛成した。

和希がいるなら少し安心だ。

校門まで戻ってきて俺達は校内へと足を入れた。

夢なのに現実かと思うほどリアル。

玄関前に来ると、そこには大きな掲示板がある。

いつもはそこには学校行事のお知らせや、中間やら期末テストの学年別順位が貼ってあるのだが。

「なんだこれ？」

和希は掲示板を見て俺に聞いてきた。

「ん？えーと・・・悪夢へようこそ。ここは現実であり夢である。なんだこれ」

掲示板に貼ってあった紙にはこう書いてあった。

### 悪夢へようこそ

ここは現実であり夢である。

校内に入るとゲームが始まる。

現実に戻るには1人殺すか、殺される。  
殺されて現実に戻れば肉体に影響される。  
1人ひとつだけ武器が支給される。  
条件を満たせば殺した人の武器は報酬として手に入る。

詳しいルールは

「ゲームってなんだ？」

「さあ？でも書いてあることを連想すると、殺し合いかな」

「殺し合い！？なんでそんな！」

「俺にもわからん。でも和希は昨日俺を殺したって言ったよな？」

「ああ。確かに悠介を殺した」

「その後、すぐに目が覚めたか？」

「いや・・・悠介が消えて動揺して、しばらくしてから目が覚めた」

「なるほどね・・・」

「だいたいこの夢の内容がわかってきた。

殺し合いをする夢。

でも普通の夢じゃない。この夢は現実とリンクしてる。

昨日俺が目覚めたとき胸に感じた違和感はきつとそれだ。

「和希。ここを見てくれ」

俺は掲示板に貼ってあるさっきの紙の一部分を指さした。

殺されて現実に戻れば肉体に影響される。

「これがどうしたんだ？」

「きつとこれはほんとだ。俺は昨日撃たれて死んだときにすぐに目が覚めた。起きたら胸に違和感があったんだ」

「それほんとなのか？」

「こんなときに嘘を言っただろう？」

「ほんとだとしたらヤバいことになったな・・・」

「ああ……とりあえず詳しいルールとやらを見てみようぜ」  
俺達は 悪夢へようこそ の隣に貼ってある紙を見た。



「このゲームって何人ぐらい参加してるんだろな」  
わからないと思うが和希に聞いてみた。

「20人・・・いや、50人ぐらいじゃないかな？」

「人数が多い方が死ぬ確率が高くなる」

「そうだな」

和希は20人と言ったとき少し焦ったか？

気のせいかもしれないが。

「ノルマ1人か・・・」

突然和希がつぶやいた。

「どうしたんだ？」

「人を殺すのは・・・ちょっと気が引ける」

「ああ・・・」

確かに人を殺すなんて俺にはできない。

でもここでは殺さなきゃ始まらないしな・・・

少し考えていると、後ろから誰かが駆け寄ってきた。

「ふうー。あぶないーい」

女性のようだが・・・誰だろう。

「お？君は初めて見る顔だねー」

女性が話しかけてきた。

「はあ・・・あの、誰ですか？」

和希が女性に聞いた。

「え？私？私は川崎ひなつて名前。19歳だよ。君は？」

「俺は、上野和希って言います。17歳です」

「ん？・・・つまいつか。君は？」

「加賀悠介です。同じく17歳」

なりゆきが掴めないまま自己紹介をしてしまった。

「もしかして・・・Aゲーム初めて？」

ひなつて人が聞いてきた。

「はい。なにがなんだかよくわからないままここにいます」

とりあえず俺は現状を説明した。

「んー、ここの張り紙は見た？」

「一応見ました。でも理解が難しいですね」

「簡単に言うと、人殺しゲームかな」

予想通りか。この人いろいろ知ってそうだな。

「ルールは簡単！殺るか殺られるかだよー」

「・・・ですよ。あの、いつからAゲームを？」

「えっとー、3週間ぐらい前かな？」

「そんなにやっててクリアできないんですか？」

「なかなかだねー。まず一定数がわかんないし」

「わからないんですか？」

「うん。あとゲームオーバーの仕組みもわかんない」

「そうなんですか・・・」

俺は疑問に思ったことを聞いてみたが情報として役立つものはなかった。

「じゃ私そろそろ行くね！」

「はい。気をつけて」

「ありがと！あー、アドバイスとして、あんまり死なない方がいいよー。じゃー！！」

ひなさんは元来た方向に走って行った。

あんまり死なない方がいい？それは当たり前だとは思っけど・・・何か意味があるのか？

「悠介」

「ん？」

やけに真剣な顔で和希が話しかけてきた。

「とりあえず誰でもいいから殺しに行こう」

さつきとは和希の雰囲気全然違う。

どうしたんだろう。

「悠介は行かないのか？行かないなら俺は1人で行く」

「ちよっと待てよ」

「なに？」

「殺しに行くって・・・俺にはまだそんな勇気ない」

「ああそう。じゃ俺だけに行く」

「お前冷たいぞ。どうしたんだ」

「どうもしてないぞ？行かないなら、おいてくぞ」

「行くからちよつと待て！」

和希がまるで別人格になったようだ・・・

俺はまだ謎が多すぎるこのゲームでムヤミに動きたくない。

和希は何か考えがあるのか？

「じゃあ行こうか」

「ああ・・・」

結局俺は和希について行くことにした。

### 3 夢 悪夢のバグ

和希に連れられてしばらく歩いた。

その間も周りへの警戒心は忘れない。和希は警戒などしていないように見える。

そろそろ歩き疲れてきたな。

「おい和希、どこに行くんだ」

「ついてこればわかる」

「あとどれくらい歩くんだ？」

「なにも言わずについてこい」

俺が何を聞いても和希は答えなかった。

単純な和希が、今回ばかりは何を考えているのかわからない。

「この辺りでいいだろう」

そう言って和希は立ち止まった。

ここは体育館裏。こんなどこに何があるんだ？まったくわからない。

「あそこに倉庫があるだろ？」

和希は前に見える体育倉庫を指さした。

「あの倉庫に隠れる」

「どうして？」

「もちろん見つからないためさ」

「誰にだよ」

「敵って言ったらわかるよな？」

「敵って……ここに来るのか？」

「おそらくな。敵が来る前に隠れるぞ」

「……ああ」

俺達は少し中が狭い倉庫に身を潜めた。外の様子が見れるように少しだけ扉は開けてある。

「なあ悠介。今から俺が言うこと、ちゃんと聞いてくれ」

「・・・なんだ？」

「あとちよつとしたら敵がここに来る。数はわからないが来るのは  
確実だ。そこでだ、俺と悠介で敵を殺す。もちろん1人ずつな」

「ちよつと待て、俺はまだ人を殺す勇氣はないんだ・・・」

「殺らなきゃ殺られる」

「それはわかってる・・・でも・・・」

「殺るんだよ。そのために俺はお前をここに連れてきた」

「少し・・・考えさせてくれ・・・」

「・・・なら時間がないから作戦の説明をする。敵がこの倉庫の前  
を通ったら、まず俺が扉の隙間から拳銃で撃つ。おそらく敵は俺の  
存在に気付く。そこで俺がここから飛び出る。悠介はまだ隠れたま  
まだ。そして俺が残りの敵を引き付ける。その隙に悠介が敵に気付  
かれないように出てくる。あとはお前次第だ、悠介がここだって夕  
イミングで刀で敵を斬るんだ」

「俺が刀で・・・」

俺にはできるのか？そんなこと・・・手が震える・・・

「刀を抜け。そろそろかもだからな」

「・・・わかった・・・」

静かに刀を抜いた。倉庫の中が狭いから刀は安全な方向に向ける  
ことにした。

「悠介・・・静かにしろよ・・・誰かきた」

「わかった・・・」

俺は息を潜めた。恐い。手が震える。

「出るぞ・・・」

和希が物音をたてずに、静かに扉を開けた。

「嘘だろ・・・？」

和希が扉の前で驚いた。しばらく動かないまま何か考えているよ  
うだ。

「和希・・・？どうした？」

「1人だ」

「なにが？」

「・・・敵が」

「それがどうした？」

「作戦が狂う」

俺たちは小声で現状を認識し合った。

「悠介、一緒に出るぞ」

「俺もか？」

「ああ、そつだ。お前は戦いに慣れた方がいい」

「うん・・・」

「行くぞ・・・！」

和希が合図をして俺は息を呑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4171w/>

---

悪夢

2011年9月23日03時11分発行